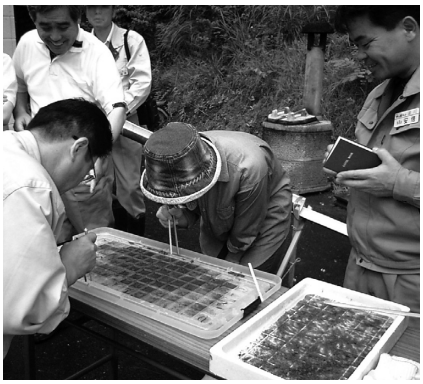
持続型農業と渡り鳥の保護を実現する「ふゆみずたんぼ」の取り組み

report

冬期湛水水田による生物多様性保全 ― 日本雁を保護する会 ―

宮城県大崎市にある蕪栗沼周辺の「ふゆみずたんぼ」。冬場の田んぼに水を張ることで生きものの活動を促し、生物多様性を活かした農業を可能にするとともに、水鳥の生息地も確保している

夏場の水田から土を取り出し、イトミミズを数える農家の人々。1反（約1000㎡）に1000万匹以上が生息しているという



日本雁を保護する会の会長であり、「ふゆみずたんぼ」を提唱する呉地正行氏。手に持っているのは、イトミミズの糞がつくり出した天然の堆肥"トロトロ層"

日本有数の渡り鳥の越冬地として知られる蕪栗沼。周辺の水田を含めて「ラムサール条約」湿地に登録されている

命の連鎖を育む水辺環境の再生

ひたひたと水を張った田んぼで、マガンが羽を休め、ハクチョウが餌をついばむ。水辺に渡り鳥が集うオアシスのような風景が、身を切る真冬の空気に潤いを与えている。

この「ふゆみずたんぼ」と呼ばれる冬期湛水水田は、宮城県北部にある伊豆沼・蕪栗沼周辺で見られる。稲刈り後の乾田に水を張ることで生きものの活動を促し、その生物多様性の力を活かした農法で、96年から実施されている。同地での取り組みは、一時は絶滅の危機に瀕したマガンの保護と深い関わりがあるという。宮城県栗原市に本拠を置く〝日本雁を保護する会〟の会長であり、「ふゆみずたんぼ」を提唱する呉地正行氏を訪ね、水田の形態や野鳥の動きを観察しながら、その関連性をうかがった。

冬の田んぼに水を張ると、稲株やワラが水中で分解されて微生物や藻が発生し、それを餌とする様々な生きものが集まる。「ハクチョウは餌場に、マガンは休息地として利用する」と、呉地会長。また、多量に繁殖したイトミミズが土の中の有機物を食べ、排出した糞が〝トロトロ層〟と呼ぶ天然の堆肥をつくる。抑草効果もあるこの土壌では、農薬や化学肥料を使わずに生産能力を上げることができる。

このような農法は、実は江戸時代から行われており、1684（貞享元）年の「会津農書」にも記されている。いにしえの技術を「ふゆみずたんぼ」と名付け、現代に蘇らせた理由を呉地会長は、「冬の渡り鳥であるマガンはかつて日本全土で見られたが、環境の悪化、沼や湿地の干拓により飛来数と生息地が減少。ガン類の保護を目的に活動する当会が先頭に立ち、安全な越冬地を取り戻さなければと思った」と、振り返る。

「ふゆみずたんぼ」は渡り鳥の格好の生息地となるだけでなく、肥沃な土壌を形成し、無農薬の安全な米づくりも実現する。

農業への恩恵があることも地元農家の人々に伝えるため、呉地会長は関係団体とともに水田の観察会や交流会を定期的に企画し、さらには環境NGO、行政の協力も得ながら「ふゆみずたんぼ」の拡大に努める。現在は全国各地で講演活動を行い、他地域での面積も徐々に増やしているそうだ。また、「ふゆみずたんぼは、今の時代に必要な持続型農業を可能にする。そのため、全国に定着させたい」と呉地会長は望んでいる。

渡り鳥を頂点とした食物連鎖が生まれ、水辺の生きものでにぎわう「ふゆみずたんぼ」では、命の循環が絶えることはない。多様な生きものが農業を支え、人とつながり、私たちが健全な暮らしを続けるために欠かせない生命の源となるだろう。その豊かな水田が様々な地域へ発展することを願いたい。

（文責・CEL編集室）

ミズアオイの花。除草剤や農薬の散布により田んぼから姿を消しつつある絶滅危惧種の植物だが、「ふゆみずたんぼ」では、いきいきと咲いている

乾田を湿地に復元した蕪栗沼に隣接する白鳥（しらとり）地区。冬場にはマガンやオオヒシクイが多数飛来し、夕方のねぐら入りと夜明けの飛び立ちが観察できるサンクチュアリとなっている

稲刈り後、水を張った「ふゆみずたんぼ」。水中では多様な生きものがうごめき、稲株を餌とする水鳥が飛来する。水鳥の糞はリン酸を多く含み、田んぼの肥料となる

蕪栗沼周辺の田尻地域で生産された無農薬の「ふゆみずたんぼ米」。弾力があり、噛むほどに味わいが増す。同地域における生産農家は11戸、作付面積は21.6ha（2008年実績）

「日本雁を保護する会」問い合わせ先

〒989-5502
宮城県栗原市若柳字川南南町16
TEL＆FAX：0228-32-2004
http://www.kt.rim.or.jp/~hira/jawgp/